

# TOKYO美人と、東京100ストーリー

## 新妻の悩み ② 3回連載(002 浅草)

穂高健一

井伊佳元は勢いよく地下鉄・浅草駅の自動改札を駆けぬけた。そのつもりだったが、寸前、バターンと無常にも塞がれた。PASMOのチャージ不足だった。精算所は長い列で、外国人、年配女性などがモタモタしている。

(これでは、こんかいも20分以上は遅れるな。時間には、いい加減さんね、と真鍋美紀から侮られそう)

彼女が指定した待合せ場所は、なんと浅草寺の『雷門』だった。井伊の意識のなかには、上野の西郷隆盛像とともに、雷門は東京に不案内な『おノボりさん』

どうし、田舎者どうしが落合う場所だ、という先入観があった。そのうえ、都内でも随一といえるほど神社仏閣、古寺名刹が多い。



真鍋美紀のハイセンスからすれば、不似合い、不釣合いの場所に思えた。

料金を精算した井伊は、改札口を出ると、すぐさま小走りになった。地下通路は極度に折れまがっている。外国人の集団がまえを塞ぐ。その脇を追いぬいた。エスカレーターは二段ごとに駆けあがる。観光客らがおどろいて、ふり向いて不快な顔で脇を空けていた。

(きのうの真鍋美紀の電話ほど、タイミングの悪いものはなかった)

井伊は、いまなおその思いを強くもっていた。

昨日の午後2時ころ、セーフティ池袋店は消防署の予告なしの査察をうけていた。制服姿の消防官は男女ふたりで、おもに避難通路の確認だった。井伊は店長として査察に立ち会っていた。

池袋店には従業員専用のPHSがある。女事務員が取り込んでいるにもかかわらず、一本の電話を取り次いだ。

真鍋美紀の声を聞いた瞬間、彼女とは3週間ぶりだ、忘れずにいてくれたのか、という想いが井伊の全身を駆け巡った。

「悪い。消防署の査察をうけているさなかなんだ」  
「話しはすぐ終わります。夫と別居が成功しました。もう10日は



ど経っているんです。次の秘策をおねがいします」

彼女の声はどこか弾んでいた。

「秘策といわれてもな……。本気で、離婚する気か？」

この一言がいけなかった。彼女を多弁にさせてしまったのだ。

「だから、別居しました。無責

任に放り出さないでくださいね。

いい加減だと、困りますから

ね」

「電話をかけなおしてくれ。こ

ちらから掛けてもいい」

「2時半から、フランス大使館

主催の重要なイベントの打ち合

わせが入っているんです。ケイ

タイはOFFにしますから、通じません」

もし、ここで強引に電話を切れば、冷淡だと思われるでしょう。

真鍋美紀からは二度と連絡してこないかもしれない。

台場公園苑のハム・ギフト伝票の電話はまったく通じなかった

……。おなじことがくりかえされるかもしれない。真鍋美紀とは

せつかくできた縁だ、それを失いたくない、という気持ちが井伊

の心のなかで渦巻いた。

消防官が2階への非常階段を上っていく。踊り場で足を止めた。

『ここに物を置いたら、ダメです。避難障害でしょ』と消防官ふ

たりが怒り顔をむけた。それは年末年始用の販促物で、店長代理



が無雑作に置いたものだ。

この池袋店は永久赤字店舗だから、ろくな中間管理職がまわってこない。いまの店長代理はとくに防災意識が低い。

片手で受話器を塞いだ井伊は、すぐ片付けさせます、と詫びた。

その一方で、かれの耳は真鍋美紀の話を聞きつづけていた。

「……わたしが別れ話を持ち出したとき、夫の俊男が怒りだしの

です。『マザコンとまでいわれるなら、自分が出て行く』といっ

て、複雑にもつれてきました。

夫婦のどちらが台場ビューマン

ションを出ていくかで、話が混

沌として、社内の恋愛から結ば

れた夫婦ですが、これまでにな

く、2週間は険悪な状況に陥っ

てしまいました」

「手短にたのむ。どっちが台場

のマンションを出ていった？」

それだけは確認しておこうと思った。

「最終的な結論はまだ出ていません。台場ビューマンションは去

年買ったばかりです。残り29年間は残ったほうが支払うことに決

めました。わたしはすぐ出て行くつもりで、芝浦にウィークリー

マンションを借りました。夫も大森のほうに」

「どちらも、台場に残りたくないわけだ」

井伊は、やばい、と思った。鉄製の防火扉のまえには、牛乳や



パンの空箱が無造作に積み上げられていた。『火事ときには、防火扉が使えないでしょ』と女性消防官が尖ったことばをむけてきた。

消防官に気づいたパートが、あわてて空箱の移動をはじめた。

「もう一度、ふたれは話し合いをもって、台場ビューマンションは交代で、一週間ずつ使うと決めました。ローンの支払いは話し合いがつくまで、ふたりで折半です。台場には家具も、衣類も、生活用品も整っていますし、便利で楽ですけど……」

「その後ののはなしは、後ほど」

「聞いてください、冷たくしないで。夫の俊男は、業界でも大手の広告代理店に勤務するサラリーマンですけど、2ヶ所の住居費の支払いはたいへんだといい、いまから悲鳴を上げています」

「手短に、たのむ」

「結婚前、いまから4年まえに、わたしは会社を辞め、イラストレーターとして独立しました。収入がまだ不安定で、不安なんです」

消火栓まえには、荷を積んだ台車が無造作に置かれていた。消防官がじろつとにらんだ。

「申し訳ありません」

井伊は消防官に頭を下げた。

「いい加減さんに、謝ってもらうことはいわ。金銭にかんして



は夫婦の問題ですから。別居の結論を出したのは、わたしの判断です。先週はわたしが台場に、今週は夫が台場ビューマンションで暮らしています」

「夫婦で、3ヶ所の住まいか……。不経済だな。まるで別居ごっこだ」

「別居ごっこじゃありません。茶化さないでください」

彼女が怒った。

「夫婦で話し合えば、きっと和解の道はあるはずだ。無駄な家賃を使わず、元の鞘にもどったら」

「逃げないでください。離婚できるまでは、責任を持ってください。なんのために、わたしに別居を勧めたんですか。いい加減な気持ちだったんですか。お忙しそうですから、用件だけにします。あした12月1日の12時ちょうど、浅草雷門で会ってください。そこで、離婚できる秘策の伝授をおねがいします」

「あしたはダメ。毎月1日は店長会議だ。外せない」

「このまま二重、三重の住居費の生活がつづけば、わたしは金銭面で破綻します。猶予がないのです。

一日も早い離婚の策をおねが





いします」

「逆立ちしても、あしたはムリだ。店長会議は風邪を引いて40度の熱を出していても、出席する。それほど重要な会議だ」

「いい加減な店長は、会社のトップから期待されてないんですよ。裏稼業を優先なさったら」

「それは嫌味？ 皮肉？ どっちにしても外れていけないけれど。あしただけは、ゼツタイだめだ」

階段への誘導灯が20W蛍光灯の玉切れで、チカチカ点滅している。開店まえの照明チェックでは、問題なかったのに。こんなときにかぎって電球が切れてしまう。ツキに見放された気分だった。

「わたしの人生など、井伊さんには無関係ですものね。どうなってもいいんでしょ。唯一たよりの、いい加減さんに見放されてしまった……」

彼女が涙声になってきた。

「見放してはいない。本気で相談にのる。あしただけはダメなんだ」

「別居してから、毎日が不安なんです。一日、一日がとてもつらいんです。苦しいんです。いい加減さんに、支えになってもらわないと……」



彼女がハンカチを出しているようすがわかった。

消防官の査察が店内の売場に移った。一階の食品売場で、足を止めた。広告商品のレトルト食品が突きだし陳列で、通路幅1.8メートルを狭めていたのだ。

消防署の歳末特別警戒は、あす12月1日以降だろうと、井伊は思い込んでいた。その甘さが自分にあつたから、売上優先で、突きだし陳列は、多少のところ目をつぶっていたのだ。

「別居が成立したなら、一刻を争う話じゃない。あさつての昼なら、何とかする」

「わたしのことを面倒な女だ、いやな女だ、変な女に付きまとわれた、と思っただけじゃありません。そうに決まっているわ」

「それは別にしても、力になる。でも、あしたはダメだ」

消防官の顔がいつそう不機嫌になった。店長が私用電話で満足に相手していない、査察はうわの空だと判断したらしい。

消防官の眼が徹底した違反さがしで光っていた。隅々まで消防法違反を見つけて、書き取っていく。赤切符を切るつもりだ。

消防官はさらに惣菜のパート従業員に、『火事になったら、何番にかけますか』と聞いていた。緊張したパートが、110番と応える。それは警察でしょ、消防



は119番。店全体の防災意識が低すぎる、と消防官が指摘する。  
「こんな東京はもうイヤです。夫も、いい加減さんもいる東京なんて、もうイヤ。いまからチケットを手配して、あさつてには成田空港から出て行きます。南米でも、アフリカでも。行き先なんて、どうでもいいんです」

彼女の嗚咽が聞こえる。深刻に悩む彼女から頼りにされている、泣く女を袖にするのは男じゃない、と井伊は思った。

「このさい店長会議はポイコットする。……学友ひとり、死んでもらう。あした浅草に行く」

「ほんとう。うれしい。ごめんね。」

取り込んでいるところ」

真鍋美紀の声がぱつと明るくなった。

「じゃあ、あした正午、雷門で」

「いい加減さんと会える、あしたが楽しみ。よろしくね」

彼女が電話を切ると、井伊はどつと疲れを感じた。

消防官が13ヶ所の改善書を出した。一週間以内の改善書を出す

こと、そのうえで、改善確認のさいど査察があると申し渡されてしまった。厄介な仕事が増えたと、井伊は吐息を漏らした。

消防官を見送った井伊は、本社の鬼頭統括部長に電話を入れた。



……学友が先週、雪の八ヶ岳で滑落し重態になっていた。一昨日とうとう亡くなり、今晚はお通夜、あす午後が葬儀と作り話を展開させた。そのうえで、葬儀に参列したいから、あすの店長会議は欠席したい、と申しでた。

「最近の勤め人は、お通夜だけですませている」

鬼頭が冷たい口調でいった。

鬼頭統括部長は伊井よりも一歳年下で、高慢な男だ。業績第一主義で伸びてきて取締役役に抜擢された人物。あらゆる面で、しごと優先だった。

「かれの奥さんは、かつて僕の恋人でした。死んだ学友と、ぼくとは争った仲です。こっちは負けましたけど」

かれは上手でない展開だと思った。

「だから、どうなんだ？ むかしの恋人が喪服をきる。だから、その姿を見にきたいわけか」

「恋敵だった学友にしる、同じ山岳部の山仲間です。生死をともにしたこと

もある。火葬場まで行ってやりたいんです」

「いい加減な店長だからな、葬儀の日取りが間違っていないだろうな」

猜疑心が強い鬼頭は、かなり疑っている。



「店の業績が悪くても、店長会議を欠席するために、友人は殺したりしません。村八分でも、葬式の付き合いだけはした、といひますから」

「葬儀は何時だ？」

「浅草寺で、12時からです」

「そんな大きな寺か。うさんくさいな」

「浅草寺には24の支院があります。実際の葬儀はそつちで」

「だったら、赤字改善の対策レポートを提出してもらおうか。店長会議に間に合うように。あしたの午前中は池袋店に出社できるな」

鬼頭は、そう念を押して電話を切った。

井伊はうんざりした。一方で、真鍋美紀に会いたい気持ちから、レポートとか、消防の改善書の作成とか、こんなにも大変なことになってしまったと、かれは吐息を漏らした。

セーフティー池袋店の閉店は夜10時だった。自宅の最寄り駅の京成立石駅については11時半。別居の独り身だから、自炊する気もなく、駅裏の居酒屋で一杯飲んで、おつまみを夕食代わりとした。

レポートが仕上がったのは明け方だった。わずかな睡眠で、池袋店に出かけた。開店した直後には、老婆が店内エスカレーターで転倒し、救急車を呼ぶ騒ぎになった。

浅草に出かける寸前の11時には、その身内が店にやってきて、事故の状況を訊く。さも、店側に管理責任がある口調で、治療費

の要求をする。当店には過失はありませんといい、井伊は突き放してから店を飛び出してきたのだ。

雷門交番まで、井伊は四方を見わたした。仁王像の陰から、

真鍋美紀が背伸びするように手を振っていた。

「待たせたな。きょうは25分遅れだ」

「昼食を取ってきたの？」

「食事どころか、出かける寸前、店内で事故が起きたから」

井伊はそれを簡略におしえた。

「大切な会議を欠席させてごめんなさい。あとで反省しました。わたしって、なんて我がままなんだろう、と」

「おかげで、消防官が13個のお土産を置いていってくれた。ふだん管理の目が行き届いていない、店長のおれに非があるんだけれど」

「勝手をいって、呼び出して、すみませんでした。浅草は『駒形どぜう』が有名でしょ。いかない？ 私のおごりね」

「割り勘で良いき。有名処の昼は、どこも混んでいると思うけど……。近くの有名なてんぷら屋にいつでもおなじこと」

ふたりは肩をならべて交差点をわたった。井伊は池袋店に呼び



戻されないように、ケイタイ電話の電源を切った

「……学友ひとり、死んでもらえたの？」

「まずまず成功した」

かれは鬼頭統括部長とのやり取りをおしえた。

「恋敵の男性は実在するひとでしょ？」

「多少は、事実に近い話じゃないと、化けの皮がはがれてしま  
う」

「井伊さんが、恋れていた女性はどんなひとだったのかしら？」

彼女の眼が興味で光った。

「女子大の家政学部の学生」

「お名前は？」

「雅美」

「恋したひとの名前は、忘れな

いものなのね。井伊さんは恋敵

の学友に負け、雅美さんを奪わ

れた。失恋物語でしょ……」

「勝ってしまった。それがいまの女房だ」

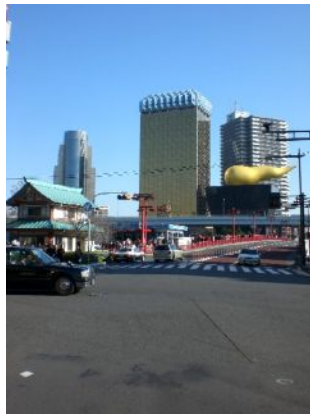
「あら、そうなの。どんな熱い戦いだったのか、聞きたいわ」

「勘弁してくれよ。雅美との恋は冷めて、いまは別居ちゅうの身

だ」

「落差が大きいのね」

「よくいうよ。そっちだつて熱い恋の果てに結婚し、一年半で離  
婚願望だ。こっちは20年間も、耐えがたきを耐えてきた」



『駒形どぜう』のまえに着いた。店外の赤い絨毯じゅうたんの長椅子には、

5組ほどが座って順番を待つ。こちらの顔を見ると、たがいに場  
所を詰め合い、ふたりにスペースをくれた。真鍋美紀とふれあう  
肩を意識する井伊は、恋人どうしの気分だった。

「いい加減さんは、日本史が得意でしょ。ここの歴史はわかる  
の？」

彼女が悪戯っぽい目をむけてきた。

「駒形のドジョウ屋は、創業が享和元年（1801年）だ。徳川  
11代將軍の家斉公時代のころ。ただ、將軍が食べに来たかとなる  
と、わからないけど……。江戸の甘味噌と、京都の赤味噌が使わ  
れた。それが人気となり、いまに引き継がれてきている」

「ずいぶん、くわしいのね」

「歴史好きだから、資料を読んだりすると、年代までも妙に頭に  
残るんだ」

「記憶力は抜群なのね」

「好きな歴史だけさ。46歳になると、従業員の名まえがふと出な  
かつたりする」

法被姿の番頭に招かれた。脱いだ靴は木戸番きどばんに渡し、葦よしの大広  
間にあがった。いく列にもならぶテーブルは、高さの低い長板だ  
った。向かい合う真鍋美紀が正座した。背筋が伸びた、いい姿勢

だ。まわりの男性が横目で見るほど、彼女はひとときわ目立つ。井  
伊はちよつとした優越感をおぼえた。

「離婚話を進めるうえで、真鍋美紀さんの経歴は聞いておきた



い」

「裏稼業の井伊さんには真つ先に、お話しするべきでしたわね。わたし東京の世田谷生まれです。小学校3年から父親の仕事関係で、一家でパリに移り住んでいました。中学を卒業するまで、日本人学校です。高校からは東京で、大学は芸術学科でイラストを学びました」

卒業後は大手広告代理店に入社。独立して食べていけるかどうか、怖かったけれど、28歳で独立し、フリーのイラストレーターになった、と彼女は語る。

湯気がたなびく熱いドジョウ鍋がきた。おいが食欲をそそる。柳川、田楽、どぜう汁がセツトになっていた。

「すると、フランス語は堪能なんだ？」

「スポットですが、国際フォーラム、国際会議で、来日したフランス人のアシストとか、フランス語の翻訳とか、来日したフランス人の観光案内なども、時どき引き受けています」

真鍋美紀が香辛料の入った箱を手元に引き寄せた。

「イラストレーターの裏稼業だ」

「愉快ね。ところで、肝心な離婚の策はどうになりました？」

「残念ながら、まだ妙案は浮かんでこない」

井伊はたつぷりネギをのせて、七味唐辛子をふりかけた。

「食べ終わったら浅草の街を散策しながら、考えてくださらない」

という真鍋美紀からは、離婚への深刻な悩みがさほど感じられ

なかった。しかし、相手の心の奥底まで、そうかんたんに読みきれぬものではない。彼女なりに苦しさを隠しているのだろう。その一方で、この自分と会えたことで、彼女の気持ちが落ち着いたのかもしれない、と井伊は考えた。

江戸の風情を感じた昼食だった。

ふたりはやがて履物問屋街の花川戸、墨田公園の川辺、かつぱ橋道具街まで足を伸ばした。途中で、人力車とすれ違った。

「わたしは婚礼人力車に乗った花嫁になりましたかっただんです……」

「古風な考えをもっていたんだな。下町情緒たつぷりだから？」

「思い出があるんです。中学2年生のときでした」

パリから一時帰国したとき、祖母に連れられて浅草にきた。嫁衣裳の新婦と、紋付はかまの新郎が人力車に乗っていた。観光客はまわりで拍手喝采。新郎新婦はみんなに祝福されていった。

中学生の彼女が手をふると、花嫁

が笑顔で応えてくれたという。

「その印象が強烈で、その日から、わたしは結婚するとき浅草の婚礼人力車に乗った花嫁になる、と心に決めていたんです」

「婚約した相手は、美紀さんの希望を無視した？ 凶星だ」

「いいえ。かれは賛成でした。紋付袴は男らしい、と。でも、マ





ザコンですから、母親の意見に逆らえず、意思を貫徹できなかったんです」

「義母は東京よりも、地元の静岡で婚礼の式を挙げたかった？」

「それも違います。義母さんは、都心の高級ホテルでないと、静岡から参列する親戚に示しがつかないからといい、強く押しつけてきたんです……。わたしたちふたりの結婚式なのに」

ふたたび雷門まで来た。7、8台の人力車が路肩に停まり、法被姿の俵夫が、観光客を呼び込む光景があった。多くの俵夫は20歳代で、みるからに筋肉質な男性だった。

「離婚が成功して、再婚するときは婚礼人力車で挙げたらいい」

「それもいいですね」

「予行演習で乗ってみたら。俵夫に値段を交渉してくるから」

「値切れるんですか」

「任せときな。言い値で乗ることはない」

井伊はあえて気が強そうな俵夫を選んだ。将棋の飛車のような顔だった。

「きょうはずいぶん暇なんだな。みんな欠伸をかみ殺している。もっと忙しい顔をしないと、値切りたくなる」

あのお嬢さんといっしょに乗るのか。この人力車は二人乗りじ



やない。

「彼女ひとりが乗る。俺は付添い人だ」

お試しコースは10分ていで2000円だ。

「浅草七福神コースがいいかな」

浅草七福神には9社寺ある。他所よりも2つ余分だ。そのぶん割高だ。1万5000円だ。

「上客だと思っただろう。一瞬、よだれが出るほど」  
冷やかしか。

「どのくらい負けてくれる？ 半額か」

協定料金がある。1円もまけられない。

「下町っ子が、鳳神社の酉の市で、熊手を言い値で買うか。浅草寺の羽子板市もおなじだ。客待ちで遊んでいる時間、走ったほうが金になる。半値の7500円でどうだ。黙って、あんたの胸に収めれば、それでいい話だ」

それはできない相談だ。

「じゃあ、おれが彼女に一切合財、社寺仏閣の由来を説明する。

これだといくら値引きする？」

社寺の説明抜きなら、2000円引きだ。1万3000円にしておく。

「情けない俵夫だな。江戸時代から、浅草の人力車は社寺仏閣の口上に値打ちあった。俺は下町育ち。口上の上手い俵夫をみて育ってきた。ただ車を引くだけなら、馬でも、牛でもできる。多少、頭が悪くても馬力ある男なら、吉野家か、松屋の牛丼一杯を食べ

させれば、2時間は人力車を引ける」

390円で、人力車を引けというのか。バカにするな。飛車の顔がムカツとした。

「向島芸者といっしょなら、気風よくご祝儀をはずむ。しかし、彼女は芸者じゃない。おれは旦那衆じゃない。懐はかぎられてい、る、8000円でどうだ。これで手を打とうじゃないか」

1万円だ。それなら、観光説明は抜きで請け負う。

「わかった。浅草神社、浅間神社、鳳神社、吉原神社、このルートから浅草七福神を回ってもらおう」

その先の社寺は聞かなくとも判っている態度で、飛車顔は彼女を車上に招き入れた。すぐさま人力車を引きはじめた。井伊は小走りに追った。

5分後には浅草神社の玉砂利の境内に着いた。真鍋美紀が下車すると、俵夫はいっさい説明をしないぞ、という態度で腕組みした。

井伊は本殿を指しながら、こう説明した。

「この浅草神社は3人の神様を祀っている。三社祭で有名だ。正和元(1312)年から、三社の神話に基づき、船祭がはじめられ



た、むかしの祭りは3月17日、18日の両日で、1年おきに本祭が行われていた。明治5年になって5月17日、18日の両日に祭礼が変わり、氏子の各町に神輿の渡御を行うようになった」

「夫と別れる策はどうなっていますか？」

「そうか、きょうのメインテーマはそれだ。ここはいきなり切り札を使おう。神様に離婚成就を祈る。ただ、神様は師走入りで忙しいから、10円や100円だと手がまわらない。1000円ならば、ご利益をたまわり、離婚できる。これは決定打になる、可能性が高い」

「他力本願なのね」

「神様の否定はよくない。祈りは大切だ。シンプルとはいえ、決していい加減な策じゃない。あらゆる願いごとの根底にあるもので、欠かすことはできない」

「お賽銭をはずんで、お祈りしてみます」

彼女が本殿で神妙に手を合わせた。そして、井伊のところにもどってきて、次の新しい策を求める目をむけた。

「となりの観音さまは欠かせない」

浅草神社と浅草寺は明治初期まで一体だった。境内もつながっている。ふたりは浅草寺の境内のほうに足をむけた。



「いい加減さんの策は、どこまで真実味があるのかしら」

「疑うと、邪心がはびこる。もっと真剣に離婚成就をお祈りするべきだよ」

「いい加減さんは、神仏を信じていますの？」

「おれが祈ると、へそ曲がりの神や仏ばかりだ。ろくに当たったことはない」

「つまり、信じていないわけでしょ」

「そうなるかな。ただ、神にも当り外れがある。それが唯一の難点だ。ここで注意しないといけないのは、縁結びの神のまえて、離婚の願いごとをしないことだ」

浅草寺の線香の紫煙がたなびく常香爐じょうこうろまでやってきた。彼女は手で煙を呼び寄せ、頭やからだをなでていた。そして、本堂の賽銭箱へとむかう。彼女が手を合あはわせていた。

「次は鳳神社だ」

「浅草七福神で、離婚成就ばかり祈っていると、今日のわたしはとても暗い気持ちになりそう。それに、縁結びの神様に祈ったら、義母さんに楯突たてつけない夫と、復縁になるかもしれない」

「そういう警戒心も必要だな。神仏に祈るのが、離婚への最上の策だと思っただけ、ここは策を切り替え、明るく演劇にいくとするか。辛気臭さをパツとはらい、笑いで、離婚の幸せを呼び込



む」

浅草は大衆演劇の元祖の地だ、とかれはつけ加えた。

江戸時代の後期には、浅草寺の境内に芝居小屋が設けられた。大道芸人が盛んになった。1917（大正6）年からは喜歌劇の「浅草オペラ」上演がはじまった。大衆演劇として隆盛したところだ、とおしえた。

「演劇は賛成ですけど、車代はどうします？ いい加減さんのことだから、値切るのでしょ」

「当然だ。2000円くらいは払っておこう」  
ふたりは浅草神社の境内にもどってきた。人力車の俣夫から見える位置にきた。井伊は突如として腹部を押さえ、しゃがみ込んだ。

「痛い。これは腸閉塞らしい。すごく激痛だ」

「大丈夫ですか？」

真鍋美紀が真にうけて戸惑っていた。井伊が嘔吐おうとの真似をする、彼女が背中を撫ではじめた。かれは内心、彼女の掌の感触を楽しんでいた。

俣夫が気づいて側にやってきた。井伊は上目で見た。



「救急病院までたのむ。赤滅灯をつけて、急いでくれ……」

人力車にはそんなものをつけてない。

「腸が引きちぎれそうだ。早くしてくれ。苦しい」

救急車を呼ぼうか。

「神社に救急車が来れば、もっと人だけりになる。ここは病院までタクシーだ。あんたには幾ら払ったらいい？ 途中キャンセルで悪いな」

3000円でいい。

「牛井代くらいかと思った。雷門から浅草神社まで、わずかの距離だ」

2000円にまけておく。タクシーを呼んでこよう。

「人力車とタクシーは商売敵だから、それはさせられない。彼女の手を借りて、通りでタクシーを拾う」



井伊は財布ごと真鍋美紀に渡した。彼女がそれを使わず、赤い財布から俵夫に代金を支払った。そして、井伊の脇下を支えるように、右手を差し向けた。かれは痛々しく立ち上がった。

「さあ、病院にいきましょう」

二歩、三歩と玉砂利を進んだ。

「行くのは演劇だろう」

彼女の耳もとでいった。

「しっ、俵夫さんがまだ側にいるのよ」

ふたりはまわりにできた人垣を割った。